

# 自己と故郷とをめぐる物語

— 広津和郎「白鳥になつた王女の物語」を読む —

## 入口 愛

### 一 都市と田園との問題

広津和郎の童話「白鳥になつた王女の物語」(『婦人画報』一九二一・四)について、拙稿で「(行きて帰りし物語)」という物語の構造をずらし、「行くあてもない(放浪者)の物語」と論じた<sup>(1)</sup>。本稿では、童話の主人公である王女と王国、換言すれば自己と故郷との關係に注目し、再考したい。まずは、童話の背景として一九一六年から一九二一年ごろの時代的な問題意識として浮上していた都市と田園との問題について見ていくこととする。

日本の近代化に伴い、首都・東京は工業都市として発展し、急速に都市化が進む。東京の都市化によって、従来はなかつた問題が発生する。一九一六年十一月の『早稲田文学』には「一個の都会問題」として、当時の東京の騒音問題が報告さ

れている。

都会——殊に近代の機械的文明の設備を多く有する——に於いて最も人間の官能を刺激するものは少くとも色彩と音響とが其の尤なるものであらう。(中略)殊に都会の騒音は甚しい。例へば電車の音、機械の音、汽車の音、自働車の音等が混合して一種言ふ可らざる不快の音響が絶えず都会人を威嚇してゐるのである。(中略)其他騒音は唯単に感覚を損傷する許りではなく、それが更に精神力に迄影響を及ぼすから恐ろしいのである。(中略)都会に於ける有ゆる方面の生活者は、其間に程度の差こそあれ、皆此の騒音に悩まれて居るのである。

都市化によつて生じた問題は騒音だけにとどまらない。東京のあらゆる場所から自然が次第に消えていったのである。東京から自然が目に見えて減少し、都会生活者の生活にも影

響を及ぼしていることが明らかになる。このような状況のなか、一九一七年七月に『中央公論』では「自然生活号」と題される増刊号が刊行される<sup>3)</sup>。ここでは、複数の識者らが「都会生活者の採り容れ得べき自然生活味」というテーマで回答をしている。徳田秋声と高島米峰の回答から当時の東京の様子を窺い知ることができるため、紹介する。徳田秋声は「夜の明け方は私の住所などではさすがに武蔵野だと云ふ感じがしますが、下町では其も駄目です。しかし朝起きはいくらか新鮮な自然に接することになりませう。晩方の散歩がい、と思ひます。しかしかう自動車や何か劇しくなつては遣切れませぬ。路傍樹の繁つた静かな人道、若しくは公園をもう少し殖したいと思ひます」と下町における自然の減少と騒音の問題について言及している。また、高島米峰は「猫の額程の空地もなく、ダリヤ一本植ゑることも出来ず、一鉢二銭の朝顔を買つても、それさへ並べる、適當の場所を持たないといふ程に、切りつめた生活をして居る吾々のやうな都会生活者が、物質的に、自然生活味を採り容れるなど、いふことは、全く空望であります」と鉢植えなどの植物さえ生活のなかに取り入れることが難しいという都会における所狭き居住空間について言及している。この居住空間の問題は、東京に人々が密集し始めたこととも連動している。東京が工業都市として発展することと比例して、地方からの流入者が増え、人口が急増する。竹村民郎は、東京の人口について「明治三十一

(一八九八)年から、大正九(一九二〇)年」の間に「一四四万から三三五万」人までに増加していると紹介している<sup>4)</sup>。東京の都市化と人口増加により、東京の至るところで都市開発、宅地開拓が進み、東京から次第に自然がなくなつたことで、都会生活者は自然の残る郊外や田園風景が広がる地域を希望するようになる。また、地方から東京へ流入し、都会生活者となつた一部の者にとっては自然を求める感情だけからではなく、故郷を離れたことによつて故郷の自然や故郷そのものを想望するようになる。人々が「故郷」を意識する手続きについて、小林敏明は次のように述べる<sup>5)</sup>。

故郷は、そのなかにどつぶり浸かつて暮らしているあ  
いだは意識されない、とかその必要がない。故郷と  
いふのは遠く離れてはじめて意識に上つてくる存在であ  
る。つまり、距離を置いて外部から「対象」として眺め  
たときに、故郷は「故郷」となるのだ。(中略)このよう  
に、故郷の意識が成り立つためには、それを外から眺め  
る機会となる出郷ないし離郷という事態が前提となる。

小林が言うように、出身地から遠く離れた東京へ出てきてはじめて、自分にとつての「故郷」を捉えなおし、意識した者は少なくなかつただろう。このように東京の都市化に伴い、都会生活者が自然や故郷を求めるといふ背景のなかで、都市と田園(故郷をも含む田園)との問題が時代的なテーマとして浮上する。これを裏づけるように、一九一六年八月の『早

稲田文学』には「田園と都市の問題」という特集が組まれる。『編集記事』には、「本誌が「田園と都市の問題」に就いて、諸家の意見を掲載したのは、最も時機を得てゐるだらう」と記載があり、時代的な関心事であることが分かる。また、一九二一年七月の『中央公論』では「都市と田園」号が刊行される。先に挙げた「田園と都市の問題」の巻頭では、都市と田園との問題の重要性について触れている。

田園には田園特有の問題があり、都市には都市特有の問題があるのは勿論であるが、近代の科学的文明が発達すればするだけ、或は人口の上から、或は労働の上から、或は商業や交通の上から、これを別言すれば政治的、経済的の幾多の利害の上から田園と都市との関係はいよいよ密接な、もしくははいよいよ激烈な、決して閑居する事の出来ない状態となり来つてゐる。更にこれを人類の精神的方面から考へる時にはまた更に重大な問題を惹起しつゝ、あるのである。

ここで注目したいのは、「精神的方面から考へる時にはまた更に重大な問題」という点である。「人類の精神的方面」が文化、芸術、宗教などの人間の精神的活動を示しているならば、そのなかに個人の精神的な課題や問題なども含まれるであろう。人間の精神的活動から都市と田園との問題を捉える場合、都市と田園との問題が自己の在り方の問題ともかわっていることを指摘しているのである。都市と田園と自己との問題に関して、一九一六年三月に東京より糸魚川へと帰

郷した相馬御風を取り上げ、考えてみたい。

## 二 相馬御風の帰郷

御風は生まれ育つた糸魚川に帰郷する前の一九一六年二月に刊行された『還元録』で、帰郷の理由について触れている。私にはすでに此の自分一個を如何にせば最も善く生かすことが出来るかと云ふ根本の信念が欠けて居たのです。それなしには何事も安んじて為し得ないところの、その根本の信念が欠けて居たのです。而もつひ先頃までの私は此の最も根本的なものを求めることの苦痛を回避して、徒らに自分の皮相な生活を切り売りして居たのです。そしてそのために却て刻々に自分の人間的生活を破壊しつゝ、あつたのです。(中略) 日一日と私の最も内部的な精神的な求め、即ち愛の心が蹂躪されて行くばかりでした。たへがたい孤独と空虚との悲しみが、刻一刻激しく私の内部から湧き起つて来ました。

私は今何よりも此の内部の孤独と空虚を充たすことに全力を挙げて徒がはなければなりません。自分みづから一個の善良なる人間とならなければなりません。(中略) 私は私みづからのたましひのありかを確めなければなりません。

御風は、東京での生活のなかで自己矛盾に気が付き、「た

へがたい孤独と空虚との悲しみ」に従つて、自分自身を問ひ直し、自分とは如何なる人間であるべきか「たましひのありか」を確認すべく、故郷に帰るといふのである。糸井川に戻つた御風は、一年四ヵ月後の一九一七年七月に「田舎に帰り住んでから」といふ寄稿文に改めて帰郷の理由を明かしている。

絶えず凡ての意味での自分の居る処に対する不安に駆られたり、他人との交渉接触に対する不安や危惧の念に苦しまされたりしながら、まるで針金のやうに張りつめた神経の痛さを感じつゝ、営まなければならぬやうな生活に堪へ得られなくなつて、貧しくても淋しくても不便でも単調でもいゝ、たゞちつと一つところに落ち着いた、定住的な生活を送りたさに、かうして自分の生れた辺土へ逃げ戻つて来た

さらに、故郷での生活について、次のように述べている。

何はともあれ、こちらへ来てからの僕にとりては、矢張此の土地の自然が一番親しいものになつて居る。(中略)大自然の偉大な、又は崇高な眺めから受ける印象は、今日の僕にはむしろ最も貴いたましいの養ひであるやうに思はれる。(中略)そして僕は、永い間の僕自身の不自然な都会生活で、精神的にも肉体的にも、みじめな不健康状態に陥つた自分が、かうした自然から与へられる養ひによつて、おひ／＼にもとの健康を取りもどし、やがては自然によつて導かれる単純な、しかしはれやかな

悦ばしい生活を営み得るやうになりたいものだ、そのことを今切に望んでゐる。

故郷の自然や生活によつて「みづからのたましひのありか」を見つつけ、アイデンティティを再確認できる場所が御風にとつての糸魚川＝故郷であることが窺える。御風にとつては、故郷なくして、自分自身を取り戻せなかつたのかもしれない。都市と田園(故郷をも含む田園)との問題における自己との関係性を考えるうえで、御風の場合は、自己と田園(故郷)とが密接な関係であることが示されているといつてよいだろう。本稿で取り上げる「白鳥になつた王女の物語」も自己と田園(故郷)とが密接に関わることをテーマとした物語といえる。

### 三 王女と王国、自己と故郷

「白鳥になつた王女の物語」のあらすじを確認しておく。「或航海師」が「北の方の国に行つた時に」、「心安く」なつた白鳥から聞いた身の上話である。白鳥は秀子という名の「或国の王様の一人娘」であつた。母親との死別後、父が再婚し、継母を迎える。はじめは家族仲良く暮らしていたものの、王である父が後継者に継母との間に生まれた娘(勝子)ではなく、秀子を選んだことにより、継母の秀子に対する態度が豹変する。秀子は心労から病にかかり、継母によつて「都から随分

離れた、淋しい鳥」に追いやられる。そこで父の死を知った秀子は「只一人杖とも柱とも頼むお父さんが亡くなられたからには、私はもう生きてゐても何の望みも楽しみもない身」とし、海へ身を投げる。<sup>10</sup>海の中で亡き父に会い、王位継承の証である「王冠の入つてゐる金庫の鍵」について伝えられる。秀子は気が付くと海辺に打ち上げられていた。そこで、目にした白鳥に変身し、故郷である王国へ戻る。戻ると、津波によつて故郷は海と化してしまふ。秀子は白鳥として生きていく。

王女⇨自己、王国⇨故郷と捉え、その関係において、この物語をみていくこととする。自己と故郷とが不可分な関係にあることは先に御風を一つの例に挙げて確認したが、この物語においては、さらに直接的に両者を結びつけている。王女は王国が存在することで王女としての自分が存在する。一方で、王国は王位を継承する者⇨王女(父である王も含まれる)なくしては存在し続けることはできない。この物語においては王女と王国、つまり自己と故郷とが切り離せない、重なりあつたものであることをテーマとし、語られていると読むことができる。物語の要所を見ていきながら、詳述していく。

秀子は継母から都を追放され、「淋しい鳥」で療養する。これは一種の離郷とも受け取ることができる。秀子は故郷の都から離れ、病のなかで王女としての自分を見失い、「私もやがて死んで行くのだ」と思い詰める。故郷から離れた場所で過ごさざるを得ない状況に陥ると同時に、王女としての自

分の存在理由を見失い、自己否定するという展開には、王女である自分と王国とが切り離すことができない表裏一体の関係であることを示唆していると解釈することができる。

さらに、秀子に王位を継承したいと望む父が亡くなったことは、秀子が王女として故郷である王国に戻ることが困難になったことを意味している。秀子が王女となる理由を自らのうちからも見つけられず、また父からの王位継承も絶たれ、王女としての自分を喪失し、「只死ぬことばかり考へ」、海に身を投げる。しかし、身を投げた海の中で秀子は亡き父に会い、父から「王冠の入つてゐる金庫の鍵」を秀子に手渡すために、秀子と「よく一緒に散歩した、あの湖の傍の森の中に」鍵を隠しておいたことが伝えられる。この場面において、王から秀子へ王位継承がなされているとも読み取ることができる。秀子は亡き父との交流により王女としての自分を再確認させられた状態で海辺に打ち上げられる。そこで秀子は飛来した白鳥を見て「自分もあの通り清い綺麗な白鳥であつたら、いらぬ心配もなくてどの位い、か知れない」という感情が起り、「自由な白鳥であれ、お前のやうにいつまでも清い白い鳥であれ……」と祈ると「白鳥の姿に化して了つてゐた。秀子が化した白鳥は、此岸と彼岸とを行き交う鳥とされている。赤羽正春は、世界各地に語られる白鳥処女説話から「天と地をつなぐ語りの中心に白鳥が配置されている」としている。<sup>11</sup>つまり、白鳥は此岸と彼岸の中間に存在する鳥とし

て語られているといえよう。身投げをした海の中で亡き父に出会う場面では、白鳥処女説話に見られるような白鳥のイメージをこの物語における白鳥も踏襲している。また、白鳥と化した秀子は、心は依然として秀子のままであるが、身体は異類である。このように、秀子の化した白鳥は此岸と彼岸を行き来する中間的な存在、人間と異類の中間的な存在という二重の意味を持っているといえる。

白鳥となった秀子は、父に教えられたとおり「湖畔の森」に行き、「王冠の入つてゐる金庫の鍵」を手に入れる。この鍵の片面には「我が胸の鍵」と彫られており、これは「この鍵の持主が王位を継ぐべきものである」という意味である。この鍵を入手したことで秀子は、本来自分のあるべき姿、つまり王女としての自分を取り戻したことになる。王女としての自分を取り戻した秀子は、「空高く一声啼き乍ら舞ひ上り」故郷を見渡す。しかし、そこで一羽の大鷲に襲われ、鍵を落としてしまう。さらに、落とした鍵を「魔法使いの爺さん」に横取りされてしまう。この場面において、秀子が「我が胸の鍵」と彫られた鍵を失ったことは、王女としての自分を失うことを意味する。秀子が王女としての自分を喪失したことによって、王女の不在が明確となり、その瞬間、津波が王国を襲い、「立派なお城も街も、今は海底に空しく横たはり」、海と化してしまふ。つまり、王女の不在と王国の消滅が同時に起こっているのである。この結末から、王女と王国とが表

裏一体であり、重なりあったものであることを読み取ることができよう。

#### 四 放浪と自由とを意味する白鳥の存在

王国に故郷を喪失した秀子は、もう王女でも何者でもない白鳥として描かれる。「その後私は多くの白鳥と共に、連れ立つて国と別れを告げて旅に出ました」といい、渡り鳥として、故郷を持たぬ者として生きる。ここには、広津自身が故郷を持たぬ者であることによる作品への投影が読み取れる。広津は幼少期をふり返り、故郷について次のように回想している<sup>13</sup>。

人の記憶や思い出に関係なく、変貌を重ねていくこの東京という大都会の非情さに、われわれは馴れっこになり、無感動になつてしまつてゐる。これが明治の植民都市東京をめがけて各地から集まつて来て、借家から借家を転々とした人達を親に持ち、東京で生れ東京で育つた子供等——即ち二世等の多くが感ずる白々しさ、自分らには故郷がないと云う白々しさである。親たちはそこを後にして出て来た故郷に対する思い出があつても、二世等には故郷の観念はない。(中略) 私などはそう云う意味で「故郷の観念」のない人間の一つの典型かもしれないし、そのことは自分の性格を考えて見る上で重要な点で

はないかと思う。心の底の何処かにヴァガボンドが住んでいるような気が、私は子供の時分からしていたものである。

「故郷の観念」を持たぬ、「心の底の何処かにヴァガボンド」が存在する広津だからこそ秀子の最終的な姿として、故郷を持たぬ、放浪する姿を選んだのではないだろうか。

さらに、物語の最後の場面で秀子は次のように語る。

或時は東に西に、又或時は北に南に、私は白鳥であるが故にこの幸福に恵まれました。本当に私は幸福であると思つてをります。

ここから、放浪と背中合わせにある自由への憧憬を読み取ることができる。秀子が白鳥に化す際にも「自由な白鳥であれ、お前のやうにいつまでも清い白い鳥であれ……」と何者にも縛られない自由な白鳥への思いが語られている。この自由への憧憬においても、広津の当時の心情が作品に投影されているといえる。「白鳥になつた王女の物語」が発表された一九二一年を含む、一九二〇年から一九二二年は広津にとつて創作意欲が湧かない「低迷」した時期であつた。その時期、広津は「何もしないで、下宿の部屋でひっくり返り」ながら、ツルゲーネフの「悔恨なき怠惰」という言葉を思い浮かべていたという。さらに「若し私が一人で何の負担もなければ、私はそうしていつまでも「無為」の中に沈溺していたかも知れない」と回想している。しかし、広津には養わなければな

らない家族（柳浪夫妻、別居している妻子等）がいるため気持ち奮い立たせ、筆を執つた<sup>④</sup>。当時の広津にとって、養わなければならぬ家族は、一面において自分を縛り付けるものであつたともいえる。自由にならない身であつたがゆえに、自由への憧憬を抱き、その思いを作品へ昇華させていたのではないだろうか。秀子が白鳥として生きる姿には、広津の放浪と自由への思念を窺い知ることができよう。

## 注

- (1) 入口愛「広津和郎の〈文学的煩悶〉時代―童話への試み―」『児童文学論叢』第十五号二〇一〇年三月
- (2) 「論説 最近思潮」『早稲田文学』一九一六年十一月
- (3) 増刊号には田中王堂「自然生活に対する憧憬の心理・倫理」、笹川臨風「我が文芸に現はれたる自然生活」、生方敏郎「田舎の男と都会の女との対話」などが掲載されている。
- (4) 竹村民郎『大正文化 帝国のユートピア 世界史の転換期と大衆消費社会の形成』二〇一〇年八月。竹村は本著のなかで矢崎武夫『日本都市の発展過程』（一九六二年三月）を用いて、全国主要都市における人口について言及している。本稿での引用箇所も矢崎の著書を用いた箇所である。

(5) 小林敏明「故郷喪失の時代」『文學界』二〇一八年  
一〇月

(6) 「田園と都市の問題」には、安部磯雄「田園生活と經濟問題」、大山郁夫「都市と生活問題」、岡田信一郎「都市の美観」、長谷川誠也「英國の田園都市を見て」、相馬御風「僕自身の見方」が掲載されている。

(7) 「都市と田園」号には四四名の識者が寄稿している。「公論」に杉森孝次郎「都市及び田園」、本間久雄「都会文芸と田園文芸」、田中王堂「補角としての都会生活と田園生活」、「説苑」に相馬御風「田園雜記」、石丸梧平「都会憧憬の心と田園を懐しむ心」、上司小剣「郊外生活の真味」などがある。

(8) 広津は御風の『還元録』に対し「相馬御風氏の『還元録』を評す」(『洪水以後』一九一六年三月)と題した評論を発表している。そこでは、御風の気質ともいえる「センチメンタリズム」、いわば「物に感心し易い心」を批判している。

(9) 相馬御風「田舎に帰り住んでから(此の書を東京にある小川未明君に寄す)」「中央公論」「自然生活号」  
一九一七年七月

(10) 童話における秀子と父の関係は、広津和郎と柳浪との関係を彷彿とさせる。広津は『年月のあしおと』(一九九八年 講談社)のなかで「私をささえていたのは、たしか

に父の存在であった。これは理窟ではない。多分愛情という言葉で呼んで好い感情なのである」と回想している。

(11) 赤羽正春『ものと人間の文化史 白鳥』二〇一二年  
法政大学出版局

(12) 拙稿(注(1)と同じ)において、広津の童話において自己の投影が見られることを指摘し、童話も「私小説」の一つのバリエーションだった」ことを論じている。

(13) 広津和郎『年月のあしおと』一九九八年 講談社

(14) (13)に同じ。

※引用は主に初出に拠った。旧字は適宜新字に改め、ルビは省略し、仮名遣いは引用文に従った。

(いりぐち・あい 名古屋女子大学短期大学部  
本学大学院平成十四年修了)